
留学報告

高度口腔機能教育研究センター
山田 友里恵

2020年1月より、ミズーリ州セントルイスにあるWashington University St. Louis (WashU) に留学する機会をいただき、visiting researcherとして研究に勤んでいます。一般的な留学報告と同様の形式でこちらの様子をご紹介しようと思ったのですが、やめます。COVID-19パンデミックをアメリカで過ごすという、全く予測していなかった事態に遭遇しました。こんな人類未曾有の危機の中、留学報告をすることはなかなかないと思うので、パンデミックにより研究室や生活がどんな風変わったか、ということにフォーカスしてお話ししたいと思います。

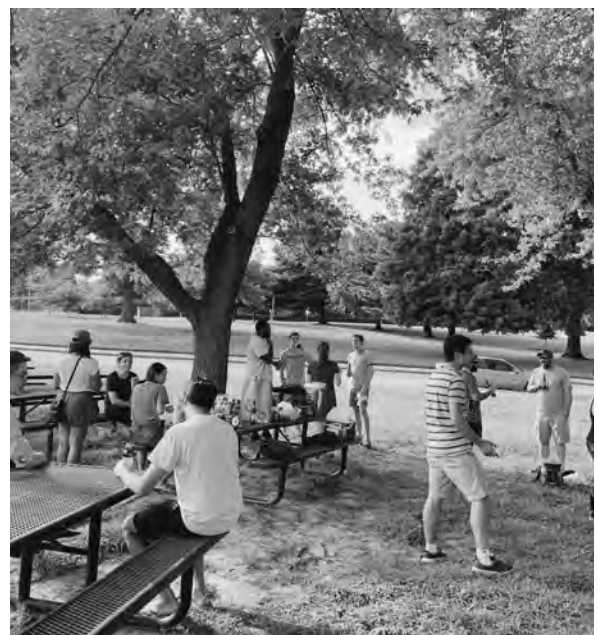
まずは簡単に留学先の紹介をします。WashUは全米大学ランキングで毎年トップ10にランクインするトップレベルの教育機関であり、研究面では各分野で世界をリードする最先端の研究が行われています。私は現在、Department of GeneticsのJeffrey Milbrandt教授の研究室に所属しています。遺伝性末梢神経変性疾患のモデルラットを使用して、病態と発生機序の解明を



Black lives matterの暴動対策で、スーパーの窓ガラスに木板が打ち付けられている

テーマに、日夜研究に励んでいます。

1月に渡米し、生活がやっと落ち着いてきた2月頃から、ニュースでCOVIDの報道が増えてきました。ただ、対岸の火事といった感じで、危機感は何も。それが3月1週目にアメリカ国内で感染者が急増し、あっという間に3月下旬にstay at homeオーダーが出ました。そこから2ヶ月間、全くラボに行けませんでしたが、この間は孤独で本当に辛かったです。5月下旬からラボに行けるようになりましたが、social distanceを確保するために、シフトワークでラボ内の人数を制限することになりました。私は朝シフトだったので、7時から終了時刻までノンストップで実験を詰めこみ、帰宅後は夜までデスクワーク。その後シャワー浴びてビール飲んで就寝、翌朝5時起床。この生活スタイルを現在までずっと続けています。限られた時間でいかに効率よく作業するか考えながら実験しているので、このスタイルで生産性が低下したとは思いません。むしろベンチとデスクで頭を切り替えてそれぞれ集中できるの



ラボメンバーのお別れ会。多くのレストランはテイクアウトのみなので、公園で。

で、私は気に入っています。ただ、ミーティングがオンラインになってしまったことは残念です。毎週のラボミーティング、3週間に1回のボスとのミーティングも全てオンラインです。ジェスチャーなしで、相手の表情を伺えずに英語でプレゼンテーションするのはかなり大変です。どうしたら聞き手が理解しやすいか、要・不要な情報の選別、スライドを工夫してプレゼンするようになりました。

この原稿を書いている今、ちょうどアメリカに来て一年経ちました。色々な意味で忘れられない

一年間でした。こんな時期でも、留学できたのは本当によかったです。こちらで学んだこと、経験したこと、出会えた人たち全てが私のかけがえの無い財産です。このような貴重な機会を与えてくださった前田学部長、大峽教授、瀬尾教授に深く感謝しております。また、日本でのプロジェクトを引き継いでくださった丹原先生、留学中もエールを送り続けてくださる高度口腔機能教育研究センター、口腔解剖学分野の先生方に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。

